

大宰府史跡

第4次発掘調査概要

1970-6

福岡県教育委員会



大宰府史跡第4次発掘調査概報

1 調査の経過

福岡県教育委員会は、昭和45年度の特別史跡「大宰府」の発掘調査として、第4次調査を終了した。

ここでは、すでに概要報告した『大宰府史跡－昭和43年度調査概要』（第1次調査）、『同一昭和44年度調査概要』（第1次補足～第4次調査）について、第4次調査の概要を報告する。第4次調査は、44年度と45年度にまたがるために、前回の報告と一部重複するところがあるが、それを補訂し、調査終了時点における所見を述べる。

第4次調査地域は、政庁中軸線から西へ約300mの地点で、蔵司址と西方の来木の2つの舌状台地に挟まれた地域である。調査地域の東半部は、現在水田となっている低湿地であり、その北側には、灌漑用の西浦池があるが、本来の自然地形は、北方の坂本部落から台地の間をぬって南下する流路があったと想定される。これに対して、調査地域の西半部は、来木の台地につづく段状をなす水田で、比較的高燥の地である。地番は、筑紫郡太宰府町大字観世音寺字蔵司443～445番地である。

本年1月、この地域を宅地造成する申請が出された。ここは元来、史跡の指定地ではないが、特別史跡指定地に隣接する土地であり、遺構の存在が十分に考えられ、かつ自然景観を保護する観点からも保存することが望ましいところである。そのため、業者の協力を得て、2月から発掘調査することになった。

今回の調査は、地形からみて政庁地域の西限の確認と、低湿地からの木製品の発見を主たる目的とした。調査の結果、東西方向の築地1と木簡9点を含む木製品を発見し、今後の大宰府研究に新たな視点を提供するものとなった。

調査地区の発掘面積と発掘期間は次のとおりである。

次数	調査地区	面積	期	間
第4次	6AYL	4500m ²	1970.2.20～	1970.5.30

Ⅱ 検出遺構

発掘調査地区の東半部の低地に、東西方向のトレンチ N・S の 2 本、西半部の台地上に、E 1～E 4、W 1～3 の各トレンチを設定、発掘調査した。その結果、築地 1、門 1、溝 3、建物 1、土拵 2、古墳時代住居址 1 等を検出した。

〔1〕築地 (1)

遺構は 3 図・6 A Y L 築地部分実測図に見られるごとく、~~遺構は~~、幅が基底部分で 4.48～4.60 m あり、東西方向に走る。築地基底部が 3 図に示すより更に東、西それぞれ連続している事は、E₁ トレンチと W₂ トレンチで確認している。遺構は南側の一部で樹木のため完全な調査は望めなかったが、不規則な間隔で穴が特に南側に多く検出した。

遺構の南面は急傾斜をなして深く落ち込み、ほぼ現地形の原形をなしている。北側には、現状で深さ約 0.40～0.70 m、幅約 1.10～1.30 m の断面をもつ半円状雨落溝を検出した。

遺構は、平坦な面に盛土したもので掘り込み等の手法は行われていない。更に南門に続く築地で見られたような、細かい築成の仕事もここでは明確でない。

遺構の位置は、蔵司の台地南端部に想定される築地に連続するものであろうが、第 1 次調査で検出した南門に接続する築地位置と比較すると、7.55 m 程南に寄っている。両者の接続の関係は今後に残された問題である。

更に、この遺構の東半部には、中心部近く 2 個の掘立柱掘方を検出した。柱の間隔は約 3.45 m で、それぞれ、断面では柱穴が重複し、更にこの柱穴部分が大きく掘り込み粘質土をいれたところにあるところから、何度かの修復が行われたものであろう。

この遺構は、掘方が、さらに東方に続くかどうかは確認できなかったが、恐らく築地の途中に開く門の遺構であろう。この位置を、第 1 次調査で求めた大宰府政庁の中軸線と比較すると、西方へ 325.30 m 隔っている事となる。この数値は、使用した単位尺の大きさの問題が残るが、大宰府政庁の中軸線からほぼ 3 町のところにその位置を占めるのである。

〔2〕西北溝、東西溝 (2)(3)(4)(5)

W₁トレンチにおいて、その西北隅で新旧二時期の西北隅溝(3)(4)と柱穴11個(5)を、また中央付近で東西の溝1条(2)を検出した。(3)(4)の溝は新旧二時期ともほぼ同一の流路であり、北方の高まりよりU字状に蛇行南下してW₁トレンチ中央を東西に走る(2)溝に流れ込む形となっている。

旧期の溝は幅1.5mを有し、地山面を掘り込んでおり、底面には礫状の小石が多量に敷かれており、また直径30~40cmの花崗岩の自然石が10個、小石敷の中に崩れ落ちた状態で埋没していた。この小石敷は下方にいくにつれて保存状態は悪く、(2)溝との合流点付近ではその痕跡は認められなかった。この(3)(4)溝の北限は発掘区域外で明確にできなかったが、かなり北方まで延びる可能性がある。

新期の溝(4)は上層を削平されており部分的には明らかにできないところもあったが、流路は古期溝(3)とほぼ同一である。しかし幅50cmで規模は小さくなっている。

また新期の溝と同時点で検出した柱穴11個のうち4個はほぼ南北線上に位置しているものの、それに対応するものが検出できず遺構として明確にできなかった。

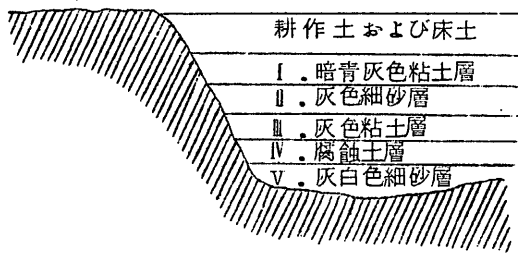
W₁トレンチの中央付近に位置する東西溝(2)は、幅3.5mのかなり大きな溝である。この溝は台地東端の断面に表われているように木簡の出土した南北の溝(6)に流れ込むものであることは推察に難くない。

古期の西北隅溝(3)は出土遺物からみて8世紀代におかれよう。

〔3〕 南北溝 (6)

調査地域の東半部の水田に、東西方向のトレンチN・Sの2本を設定し、発掘調査した。その結果、当初から想定されていたほぼ南北方向の溝(6)を検出した。溝の幅は約26m、深さは2.0mをはかる。Nトレンチにおける溝の層序は、耕作土・床土の下が5層に分けられる。(模式図参照)

第1層は、やや出土遺物に混入が認められるが、第Ⅱ層~第Ⅴ層は、整序をなしている。このうち、とくに第Ⅳ層は、植物性遺物が圧縮された厚さ約20~40cmの腐蝕土層で、この層中から木簡9点をはじめとして須恵器を多数発見



(Nトレンチ溝土層模式図)

ってNトレンチの地点が、溝のほぼ傾斜変更線となり、しかもその西岸に堆積が集中したと解される。この層は、木簡から年代がある程度限定できるので、伴出遺物を検討することによって、その絶対年代の一つのメルクマールとなり得よう。

(4) 古墳時代住居址(7)

築地の基底部の下から、地_山を切りこんだ堅穴住居1の隅(7)を検出した。これは築地の構築によって、その大部分を破壊されているため、その規模は、不明であるが、床面に貼床が認められ、壁面に接して炉址を確認した。炉址から鬼高式の杯身を発見した。

Ⅱ 発見遺物

(1) 土器

第4次調査により、各遺構から多数の土器が出土した。それらの中で層位的に検出できる南北溝(6)出土の土器について現在整理中であるが、その概要を報告する。

このトレンチから、うかがわれる南北溝(6)の層位は5層よりなる。

第1層は、主として磁器、瓦器、須恵器や土師器等が出土した。土師器皿の底部には糸切り痕が認められる。

第Ⅱ層からは、底部に籐状圧痕を有する土師器杯と黒色土器等が出土している。黒色土器は、内外面ともに黒色処理されたものと、いわゆる内黒土師器の2種類である。これらの土器は平安末から鎌倉時代頃と思われる。

した。また瓦は1点も含んでいない。この第Ⅳ層は、溝の西岸から約10mの範囲に厚く堆積し、それより東は、次第に薄くなると共に、遺物をほとんど含んでいない。またSトレンチでは、第Ⅲ層は認められないと共に、^Ⅳ全体として遺物は極めて少ない。従

第Ⅲ層から底部に「一」の墨書銘を有する須恵杯を発見した。低い高台と、やや口縁部が外反する器形で、奈良から平安期の特徴を示している。

第Ⅳ層出土の土器は、ほとんど須恵器である。圧倒的に杯が多く、少数の甕が出土している。杯身の立上りは薄くやや外反しながら高く立上るものと、厚く内反し低い立上りを有するものがあり、杯蓋はつまみを有しない無返りのものと、つまみを有する有返りのものがある。このことから、この層は6C後半から7C終末頃・形成されたものであろう。

第Ⅴ層から出土する土器は全部彌生式土器である。板付式の円盤貼り付けの底部をもつ壺や口唇部に刻目を有する甕等と中期の土器を多量に発見した。

〔2〕瓦

瓦は、築地(1)、南北溝(6)の第Ⅰ層～第Ⅲ層および西北隅溝等から発見した。南北溝の第Ⅲ層から出土した老司系軒丸瓦は、短い複弁八弁瓦で、中房珠文1+6+10、外区珠文36であり、瓦当面と丸瓦との接合は円筒のまま接合する仕方で、瓦当裏面周縁に切断の際の隆起の跡をとどめている。奈良後半から平安前期の特徴を示している。その他、軒瓦は検出できなかった。西北隅の溝中の瓦は、すべて縄目で、比較的細かい布目である。

〔3〕木製品

Nトレンチの南北溝(6)より、木製品・木片が出土した。この溝は5層に分かれ、木製品は第Ⅱ～Ⅳ層から検出した。特に第Ⅳ層からは木簡をはじめ、それに伴って木製品・木片が出土した。木製品中、用途の明らかなものとしては椀、曲物の蓋、下駄、^籠_(か)(糸車)等がある。しかし、破片のため、本来の用途を知りえないものが多い。

椀

2点あり、1点は漆器である。2点とも第Ⅱ層よりの出土で同地点より検出した。漆器の椀はロクロで挽いたもので、底部に高台を削り出している。ほぼ完形である。もう1点は底部のみであるが、高台の形状は漆器のそれに似ている。これには底に「大」の文字が線刻してある。また、椀の未製品と思われる、荒削りした筒状の木器が出土している。

円

下駄

第Ⅳ層から1点出土した。先端部のみで全体の形状は不明であるが、中央に孔が1個あけられている。

曲物

蓋と思われる円形の板で1ヶ所孔があけられている。また曲物の側板と、それをつなぎ合わせるのに用いた桜の樹皮が数点出土した。



第Ⅳ層より、破片が1点出土した。

その他

用途不明のものとして、羽子板状の木製品と、紐孔を両側に有する平板2枚がある。これは両端が円味を帯びている。また第Ⅲ、Ⅳ層より自然木の先端を尖がらした杭が多量に出土した。

Ⅳ 第4次調査出土木簡

(R番号) (形式)

- 001 081 「疾病為依」
日下部牛
(管カ)
里長日下部君牛寄」
- 002 091 「大夫之
- 003 032 「太丹三日
- 004 061 「八月日貸稻聚人 物
- 005 081 「果
- 006 011 「告稻事者受食白 大伴マ尸手
- 007 081 「守

以上の7点の他に、明らかに墨書があったと認められる木簡が2点あるが、判読が困難である。

またR-004は物指の裏面を利用した木簡である。現存長14.770cmで、1寸毎に区分し、ほぼ5寸分にあたる。さらに、その1寸を4区分しているが、それらはいずれも正確には等分されていない。計測表を下に示す。

		①	②	③	④	⑤
右側	0.25寸	0.860 0.795 0.680 0.765	0.815 ???	0.950 0.735 0.795 0.670	0.795 0.760 ? ?	0.860 0.815 ? ?
	0.5寸	1.690 1.495	(1.570) 1.740	1.680 1.410	1.540 1.460	1.685 ?
	1寸	(3.185)	2.820	3.080	2.985	?
左側	0.25寸	0.940 0.765 0.725 0.740	0.730 0.760 0.720 0.660	0.795 0.750 0.740 0.755	0.755 0.755 0.780 0.680	0.795 0.665 0.880 0.410
	0.5寸	1.655 1.460	1.500 1.420	1.555 1.460	1.520 1.475	1.440 1.265
	1寸	3.140	2.905	3.040	3.000	2.795

(単位 cm)

この物指の1寸の平均値を求めると、

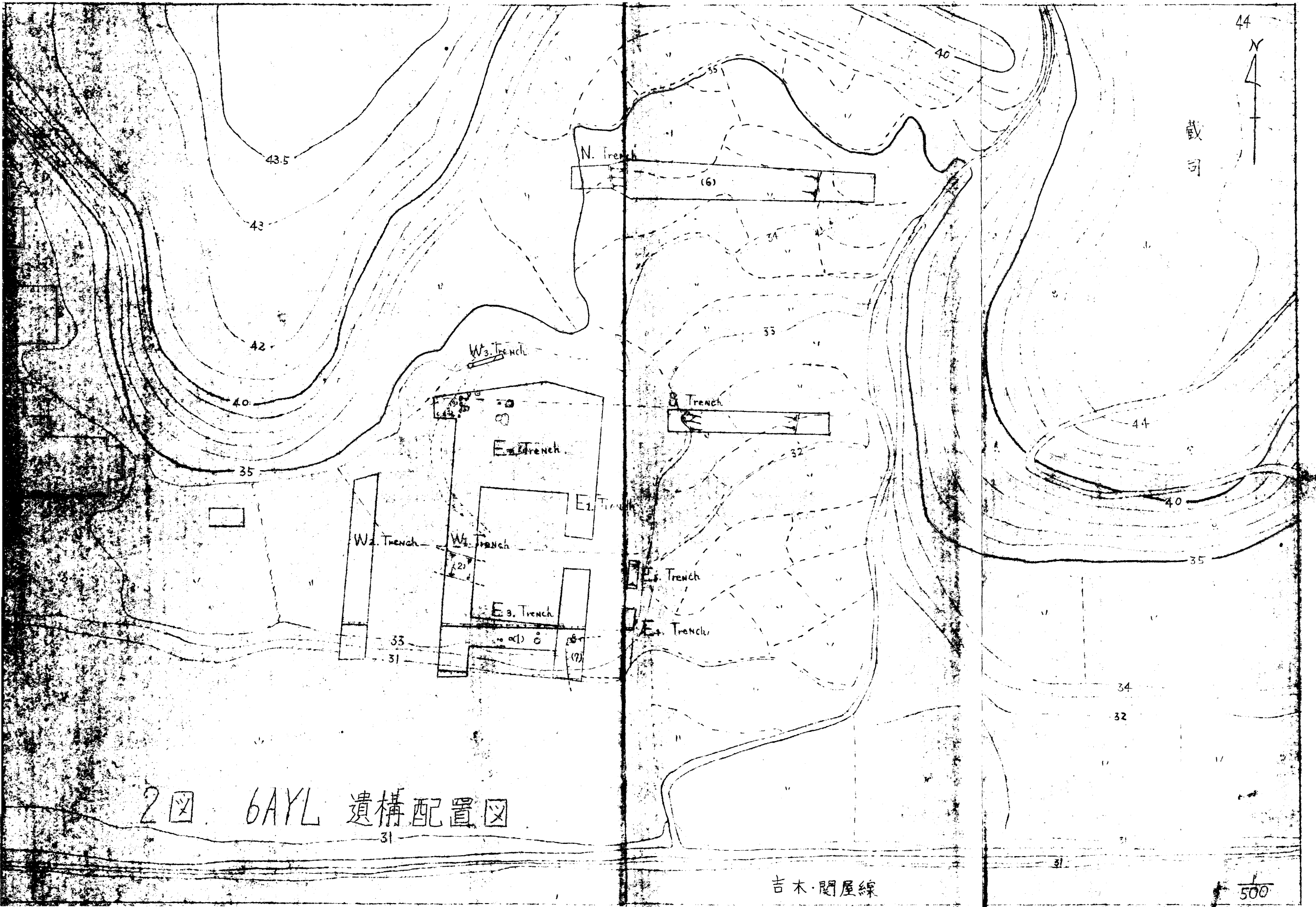
$$2.9367 \underset{\text{右}}{\leftarrow} \text{← 1寸 ←} \underset{\text{左}}{2.9767} \text{ である。}$$

(計算方法)

右、左側とも①と⑤は端部のため磨滅しているため、これを除外して考察する。いま右側について、②+③+④=8.885となり、②~④を計測すると8.810となる。その誤差配分をすると、8.885-8.810=0.075となり、

それを3等分した0.025を②、③、④の各々から引いた値は、②＝(2.795)、
③＝(3.055)、④＝(2.960)となる。この値の平均値を求めると、1寸は
2.9367となる。左側についても同様な計測をすると、1寸は2.9767となる。
~~従ってこの物指の1寸は2.9367<1寸<2.9767となる。~~

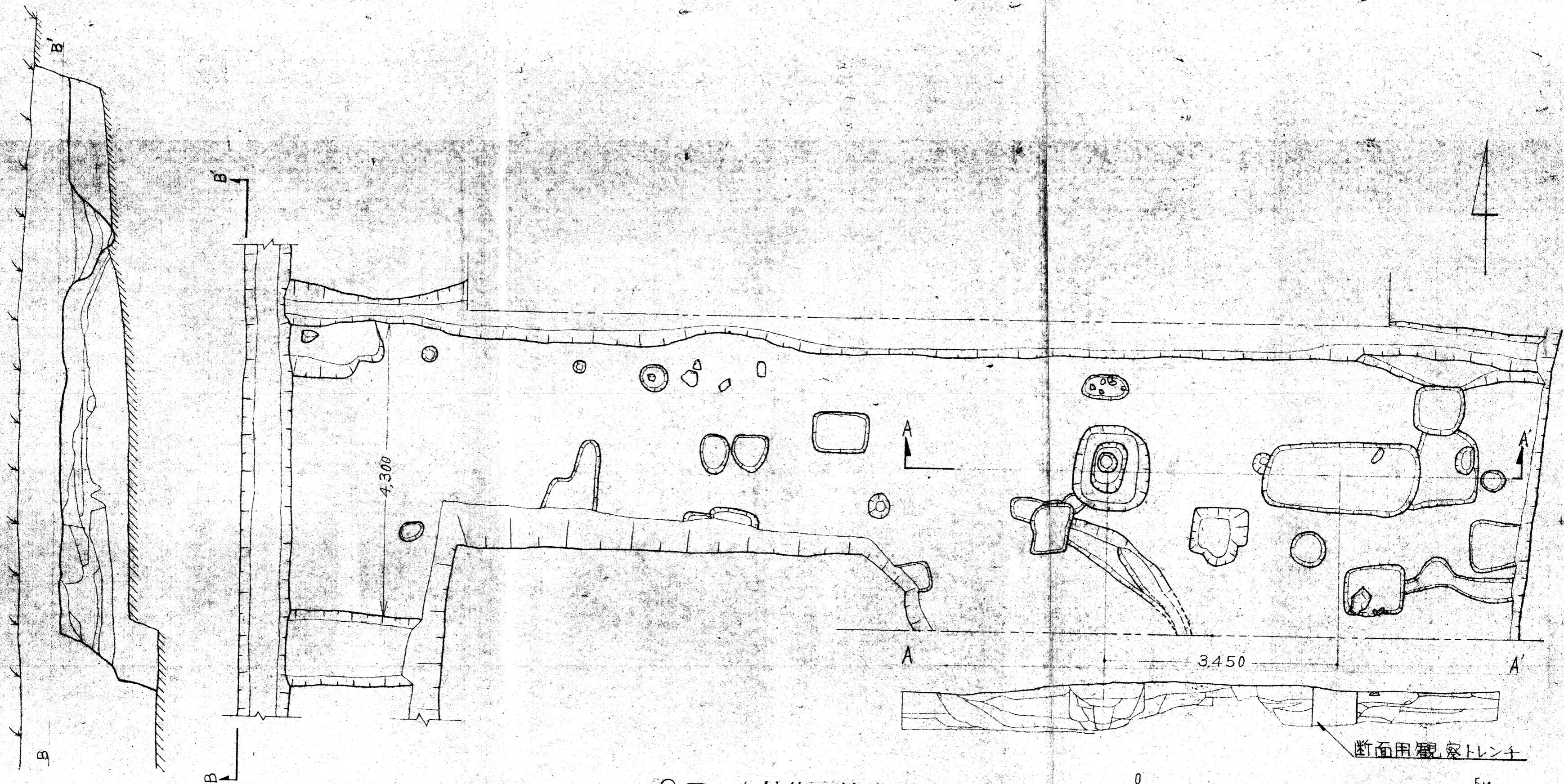




2図 6AYL 遺構配置図

吉木・閤屋線

500



3図. 6AYL. 築地部分実測図.

疾病為災



日下庚午
里長日下庚君生有

081



大夫曲

091



右冊紀
三日

文頤許大伴乃

032

无故存诗多言

昭生白

告稍事者爰良白 大保下月寺此



3.140 + 2.925 + 3.060 + 3.000

3.10 2.820 3.080 2.780

自記配福数翠天賜

061